

静岡県立大学短期大学部

研究紀要 12 - 3号 (1998年度) - 4

依存的な人にとってのソーシャル・サポートの限界 他者依存性と知覚されたサポートの効果に関する基礎的研究

福岡 欣治

Dependent people can perceive some help
but cannot gain its helpfulness:

A study of interpersonal dependency and perceived social support

FUKUOKA, Yoshiharu

要旨：他者への依存性の高さによって、知覚されたサポートが量的に異なるのかどうか、また生活ストレスとの関連からみた心理的苦痛に対するサポートの効果が依存性の高さによって異なるのかどうか、を大学生160名を対象に検討した。その結果、他者依存性の高い人では、父親、母親、同性の友人を含む周囲の人々からのサポートの入手可能性が低いわけではないにもかかわらず、心理的苦痛に対するサポートの効果は全くみられなかった。このことは、他者への依存性の高い人では、サポートがあってもそこからポジティブな効果を引き出すことを困難にする何らかの心理的要因があることを示唆する。

問 題

周囲の人々との間に温かい関係をもつことは、個人の心理的安寧 (psychological well-being) にとって極めて大きな意味をもつ、と一般に信じられている。こうした対人関係の問題を扱うものとして注目されてきたのが、ソーシャル・サポート (social support) 研究である。1970年代の半ば以降現在まで、ソーシャル・サポート研究は、支持的な対人関係の存在やそこから得られる様々な援助 (久田, 1987も参照) が、生活上のネガティブな出来事 (ストレス経験) に対する直接的ないし間接の対処資源として、人の心身の健康が損なわれるのを防ぐ役割を果たすことを主張してきた (Cobb, 1976; Gottlieb, 1981; Cohen & Syme, 1985; Veiel & Baumann, 1992等を参照)。

ところで、こうした他者との温かい関係をもちたいという欲求は人間にとって基本的なものとされるが (Baumeister & Leary, 1995)、中には、こうした欲求が特に強い人が存在する。パーソナリティ特徴としての他者への依存性が強い人である。Bornstein (1992) が述べているように、依存的な人は、その根底に養護的・支持的な関係を獲得し維持した

いという強い欲求をもつ。しかし一方で、依存性の高さは抑うつをはじめ種々の心理的苦痛をもたらす危険因子であることが指摘されてきている（例えば Blatt, D'Afflitti, & Quinlan, 1976; Bornstein & Johnson, 1990等）。例えば Overholser (1992) は、大学生のサンプルにおいて依存性が高いほど抑うつ的であること、さらに依存性の高低による差異が10か月後の追跡調査時にもなお有意であったことを報告している。

さて、依存性の高い人が心理的な苦痛を感じやすいのはなぜであろうか。ソーシャル・サポート研究では、周囲の人との支持的な関係が安寧に寄与することが主張されている。依存性研究では、そうした欲求の強い人が心理的苦痛を感じやすいことが示されてきている。とすれば、依存的な人は支持的な関係をもっていないために心理的な苦痛を感じるようになるのであろうか。あるいはまた、支持的な関係そのものはあっても、それが安寧に寄与するような効果を持たないのであろうか。もしも依存的な人でも、支持的な関係があれば心理的な苦痛は防がれるのであろうか。また、生活上のストレスとの関係からみたソーシャル・サポートの効果、すなわち多くのストレスを経験している場合にサポートが効果を発揮するというストレス緩衝効果、あるいはストレス経験の多少にかかわらずサポートが一定の効果を発揮するという直接効果は、依存性の高い人と低い人とで違いがあるのであろうか。

依存性とソーシャル・サポートの関係については、これまで関連する研究がいくつか報告されてきている。例えば Keinan & Hobfoll (1989) は、女性の出産時に夫がそばにいることを情緒的なサポートとみなし、初産の（ストレスフルな状態にある）女性で依存的な人は夫の存在によって不安が軽減されることを報告している。これは「依存性の高い人の方がサポートの多寡による影響を受けやすい」ことを示す結果と言えるが、必ずしもすべての研究がそうした結果を得ているわけではない。たとえば、Lefcourt, Martin & Saleh (1984) は、大学生を対象とした質問紙調査において、他者と一緒にいたいという親和欲求の高い人ではサポートの効果があまりみられず、むしろそうした欲求の低い人の方が、ソーシャル・サポートの心理的苦痛を和らげる効果がより顕著にみられることを報告している。この研究では依存性それ自体を変数として扱っているわけではないが、親和欲求とパーソナリティとしての依存性は他者との情緒的なつながりを求めるという点で概念的に類似しており、Keinan & Hobfoll (1989) の結果とは対応していない。なお後者のような知見は Hill (1987) においても見出されており、例外的な結果として片づけることはできない。なお、これらの研究で扱われているのはいずれも実際に受けたサポートであり、周囲の他者から必要なときに助けが得られると思うか、というサポートの入手可能性、いわゆる知覚されたサポート (perceived support) については従来まだ検討されていない。

そこで本研究では、他者への依存性の高さによって、知覚されたサポートの水準が量的に異なるのかどうか、また生活ストレスとの関係からみたサポートの効果が依存性の高さによって異なるのかどうか、を大学生を対象に検討するものとした。なお、ソーシャル・サポート研究ではサポート源の違いによって心理的苦痛に対する効果の現れ方が異なることが従来の研究でたびたび指摘されていることから（例えば福岡・橋本, 1992）、本研究ではサポートの入手可能性を、周囲の人々全般のほか、個別的・具体的なサポート源を代表するものとして「父親」「母親」「同性の友人」についても測定し、それぞれのサポート得点について依存性との関連性を検討するものとした。

方 法

被調査者

D大学の大学生を被調査者とした。数名の記入不備を除いた有効サンプル数は計160名（男子67名，女子93名）であり，平均年齢は19.52歳（SD = 0.94）であった。居住形態については，自宅通学者が101名，自宅外通学者が60名であった。

測定内容

他者依存性 McDonald-Scott (1988) による Hirschfeld, Klerman, Gough, Barrett, Korchin, & Chodoff (1977) の他者依存性尺度の日本語版を用いた。23項目からなる4件法（1 = そうでない～4 = 非常にそうである）の尺度である。原版は「情緒的依頼心」「社会的自信の欠如」「自律の主張」の3つの下位尺度からなるが，「自律の主張」については他の2尺度と相関がほとんどなく，尺度構成上問題があるとされる（Birtchnell, 1991）。本研究のサンプルでも同様の結果であったため，今回は「情緒的依頼心」「社会的自信の欠如」の2尺度の合計点をもって他者依存性の指標とすることにした。なお合成前の2尺度間の相関は男子では0.53，女子では0.38，全体では0.44（いずれも $p < .001$ ）であり，合成後の全体での係数は0.80であった。高得点であるほど，周囲の他者一般に対して依存的な傾向にあることを示す。

知覚されたサポート 福岡・橋本 (1993) による21項目の尺度を用いた。日常生活の中での援助的な行為について，その入手可能性を5段階で評定（1 = まったくしないと思う～5 = たいへんよく思う）させる。調査時には周囲の人々全体および計11の対人関係についても評定を求めたが，分析にあたっては，代表的と思われる「周囲の人々全体」「父親」「母親」「同性の友人」についてのデータを分析に用いた（以下それぞれ，適宜「全体サポート」「父親サポート」「母親サポート」「友人サポート」と表記する）。なお，21項目はサポート内容別として「アドバイス・指導」「なぐさめ・励まし」「物質的・金銭的援助」「具体的行動による援助」を含むが，これら相互の相関が比較的高いこと（福岡・橋本，1995b も参照），またサポート源に注目する目的も考慮し，本研究では21項目全体での合計点を算出して用いた。係数はいずれも0.90以上であった。

ストレッサー経験 尾関 (1990) による大学生用生活ストレッサー尺度を用いた。大学生が体験しやすい出来事計40個について，それぞれを過去6か月間に体験したかどうか，および体験した場合にはそれがどの程度つらいものであったかを7段階（-3 = 非常につらかった～+3 = 非常に楽しかった）で回答させる。本研究では，サポートのストレス緩衝効果を検討する目的から，福岡・橋本 (1995a) と同様に，体験しかつネガティブに評価された出来事の個数をストレッサー経験の指標とした。

心理的苦痛 Zung (1965) の抑うつ性尺度SDS (Self-rating Depression Scale) の，福田・小林 (1973) による日本語版を用いた。20項目，4件法（1 = ほとんどそういうことはない～4 = ほとんどいつもそうである）の尺度であり，全体の合計点が指標として用いられる。得点が高いほど抑うつ傾向が強いことを示す。係数は0.79であった。

実施方法

D大学における心理学関連科目の受講者を対象に調査票を配布し，その場で回収した。実施時期は1992年12月であった。分析にあたり欠損値があった場合には，当該の分析時のみ除去した。

結 果

基礎統計量

最初に，各指標の平均値とSDを算出した．居住形態別にも算出して比較したが有意な差異はほとんど認められなかったため，Table 1には全体および男女別の結果を示す．他者依存性，ストレス経験，心理的苦痛については有意な男女差は見られなかったが，ソーシャル・サポートについてはいずれも女子が男子よりも高得点であった．

Table 1 各指標の平均値とSD，男女差

指 標	全体		男子		女子		t 値
	平均	S D	平均	S D	平均	S D	
他者依存性	34.31	6.87	33.44	6.95	34.93	6.77	1.35
全体サポート	79.20	12.14	73.75	11.30	83.05	11.25	5.09***
父親サポート	83.79	12.55	79.41	16.49	87.00	14.07	3.09**
母親サポート	90.00	13.78	82.73	14.92	95.24	10.11	5.95***
友人サポート	81.99	13.18	78.73	15.01	84.33	11.19	2.58*
ストレス経験	8.20	4.94	7.67	4.92	8.58	4.94	1.15
心理的苦痛	42.52	7.16	43.33	7.35	41.94	7.00	1.18

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$ + $p < .10$

指標間の相関関係

続いて，他者依存性の高さによってサポートの入手可能性の程度が異なるのかどうかを検討するため，ストレス経験および心理的苦痛も含めて，指標間の相関係数を算出した．なお，サポート得点に有意な男女差が認められたため，ここではサンプル数の少なさも考慮して男女共通での関連性を抽出するものとし，性別をダミー変数として（男 = 1，女 = 2）その影響を取り除いた偏相関係数を算出した．その結果，Table 2に示すように，他者依存性とソーシャル・サポートの間には，「全体サポート」をはじめ，サポート源別にみた「父親サポート」「母親サポート」「友人サポート」のいずれについても，何ら相関関係がみられなかった．これは，依存性が高い人であっても低い人であっても，同程度にサポートが得られると認知していることを示す．他者依存性とストレス経験，心理的苦痛の間には有意な正の相関があり，依存性が高いほどつらい出来事を多く経験しており，抑うつ傾向も強いという結果であった．その他，サポート指標はストレス経験とは相関がみられず独立していた．一方，各サポート指標は，心理的苦痛とは0.1%ないし10%水準での負の相関が認められた．これは，いわゆるサポートの直接効果を示すものといえる．またストレス経験と心理的苦痛の間には有意な正の相関があり，つらい出来事を多く経験しているほど抑うつ的になりがちであることを示していた．なお，サポート

指標間にはいずれも正の有意な相関があり，特に父親と母親についてのサポートは強い関連性がみられた．

Table 2 性別の影響を取り除いた指標間の偏相関係数

指 標						
他者依存性	1.00					
全体サポート	-.10	1.00				
父親サポート	-.07	.36**	1.00			
母親サポート	.03	.41***	.82***	1.00		
友人サポート	-.08	.53***	.50***	.52**	1.00	
ストレッサー経験	.32***	.03	-.02	.10	-.05	1.00
心理的苦痛	.34***	-.35***	-.16+	-.15+	-.36***	.33*** 1.00

***p<.001 **p<.01 *p<.05 +p<.10

他者依存性の高低別に見たソーシャル・サポートの効果の検討

さらに，他者依存性の高さによって，心理的苦痛に対するソーシャル・サポートの効果に違いがみられるかどうか，を検討した．ここでサポートの直接効果は，サポートと心理的苦痛との直接の関連性，言い換えれば従属変数としての心理的苦痛に対するサポートの主効果によって，またサポートのストレス緩衝効果，すなわちストレッサーの悪影響がサポートの存在によって和らげられるかどうかは，心理的苦痛に対するサポートとストレッサー経験の交互作用によって検証される．そこで本研究では，まず他者依存性の中央値によって依存性の高群と低群を設定し，またソーシャル・サポートの各指標とストレッサー経験についても同じく中央値によって2群に分割した．そして，依存性の高群と低群それぞれについて，心理的苦痛を従属変数，ソーシャル・サポートとストレッサー経験を独立変数とする2要因分散分析を，サポートの各指標別におこなった．性別については，先の相関分析と同じく統制変数とするため，ダミー変数による共変量として扱った．なお，サポートのストレス緩衝効果の検討にあたっては，交互作用項を含む重回帰分析（Aiken & West, 1991）がしばしば用いられる．本研究のような分散分析ないし共分散分析はそれに比べるとやや検定力が低下するが，分析の目的としては同様であり（稲葉，1992も参照），比較的保守的（conservative）な方法として，研究では採用するものとした．

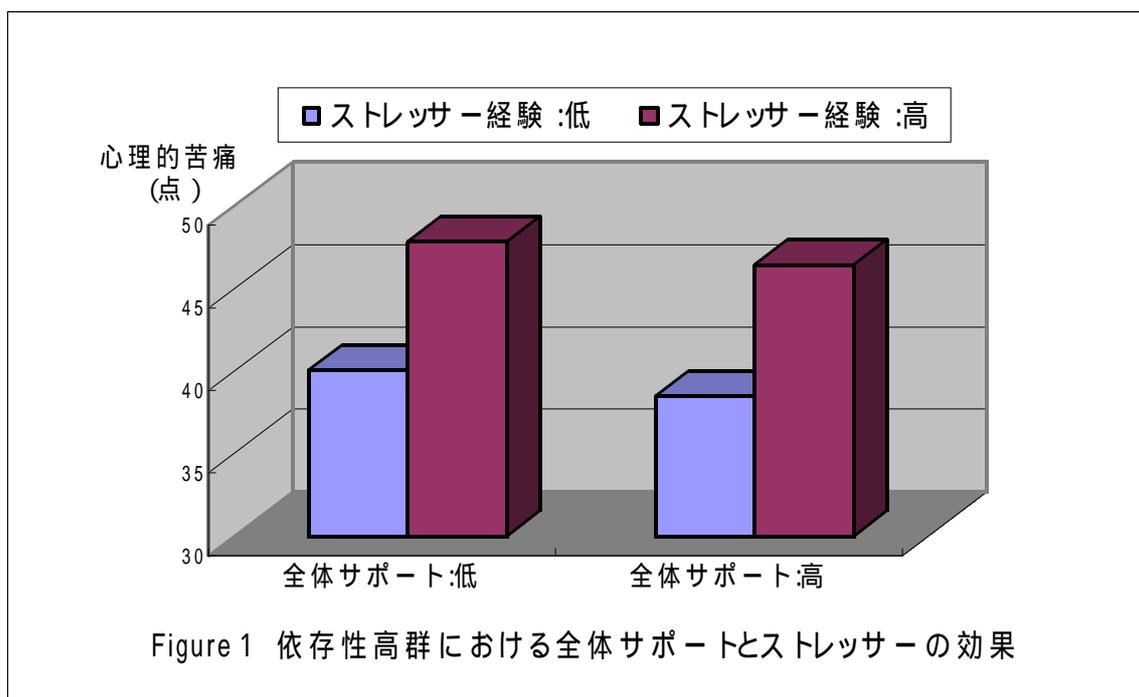
他者依存性の高群における分析 他者依存性の高群における共分散分析の結果（主効果および交互作用効果のF値と有意水準）を，Table 3に示す．4つのサポート指標それぞれによる分析を通じて，いずれもストレッサーの主効果による寄与が極めて強く，サポートの主効果，および交互作用効果はいずれも有意な水準に達していなかった．

Table 3 他者依存性の高い群における共分散分析の結果 (F 値と有意水準)

サポート指標の種類	主 効 果		交互作用
	ストレッサー	サポート	
全体サポート	24.93***	0.93	0.01
父親サポート	24.39***	0.59	2.74
母親サポート	24.02***	0.73	0.90
友人サポート	23.91***	0.82	0.51

***p<.001 **p<.01 *p<.05 +p<.10

これらサポート指標別による4通りの分析の結果はおおむね一致しており、例として全体サポートの高低とストレッサー経験の高低の組み合わせによる心理的苦痛の平均値を、Figure 1 に示す。依存性の高い人では、サポートの高低による心理的苦痛の違いは何ら認められず、サポートが低くても高くても同様に、多くのストレッサーを経験するほど心理的苦痛が増大する、という関係が顕著に認められる。



他者依存性の低群における分析 他者依存性の高群における共分散分析の結果 (主効果および交互作用効果の F 値と有意水準) を、Table 4 に示す。依存性高群の場合と異なり、ストレッサーの主効果は何ら有意ではなかった。一方、サポートの主効果は、全体、父親、母親、友人のすべてで有意であった。さらに、父親サポートでは交互作用も10%水準なが

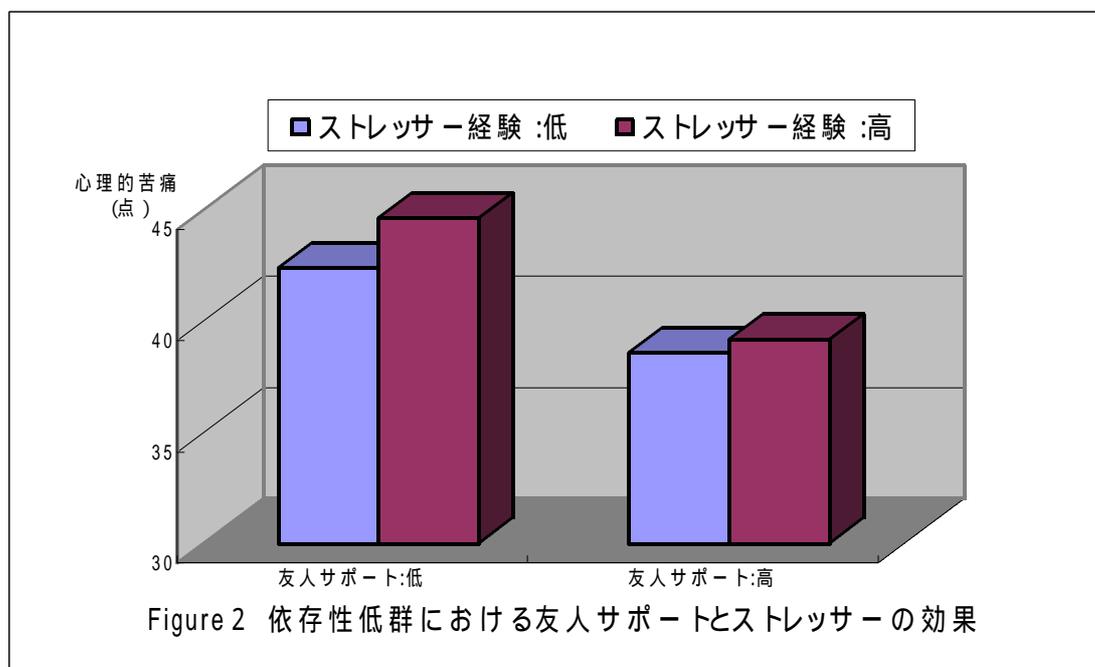
ら効果が認められた。

Table 4 他者依存性の低い群における共分散分析の結果 (F 値と有意水準)

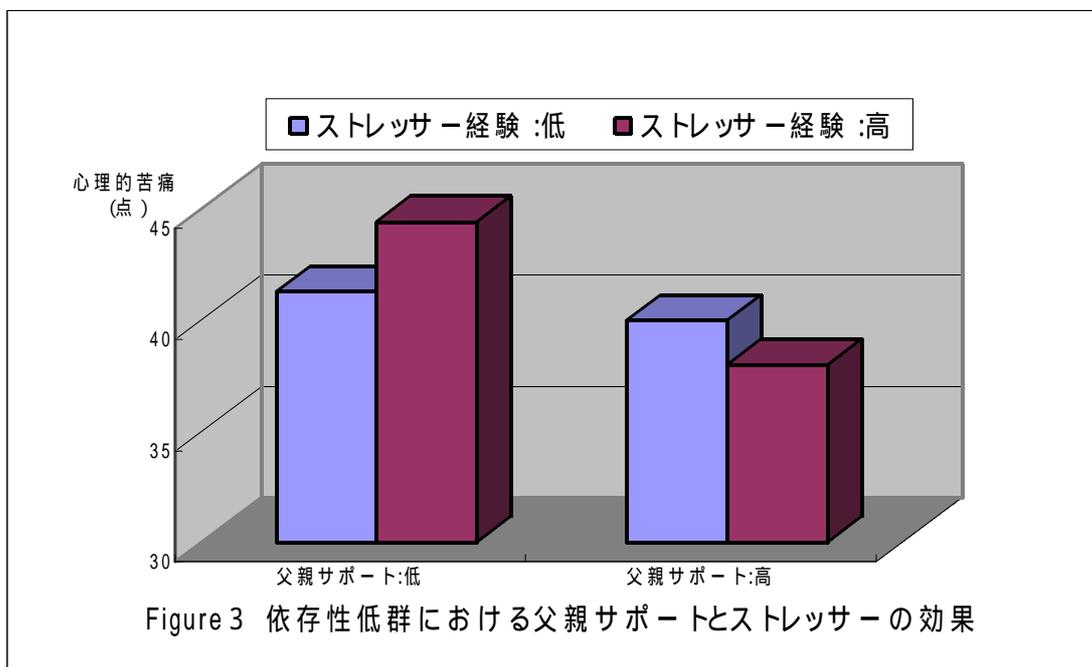
サポート指標の種類	主 効 果		交互作用
	ストレッサー	サポート	
全体サポート	1.04	7.01**	0.06
父親サポート	0.27	4.73*	2.83+
母親サポート	0.62	4.15*	0.18
友人サポート	0.86	9.58**	0.29

***p<.001 **p<.01 *p<.05 +p<.10

ストレッサー得点の高低×各サポート得点の高低別に心理的苦痛の平均値をみると、サポートの主効果のみが認められた全体、母親、友人サポートの分析はいずれも同様の結果であった。そこで、例として友人サポートの高低とストレッサー経験の高低の組み合わせによる心理的苦痛の平均値を Figure 2 に示す。この場合、依存性の低い人では、ストレッサー経験が少なくてもサポート得点が低いと強い心理的苦痛を感じており、ストレッサー経験が多くてもサポート得点が高ければ心理的苦痛をそれほど感じていない、という結果であるといえる。



また、ゆるやかながら交互作用効果がみられた父親サポートの高低とストレス経験の高低による心理的苦痛の平均値を Figure 3 に示す。父親サポートが低い場合にはストレス経験の増加にともなって心理的苦痛が増しているのに対し、父親サポートが高い場合にはそうした関係がみられない。単純主効果の検定によれば、統計的に有意であったのは、ストレス経験が多い場合の父親サポートの効果であった ($F(1,74)=8.91, p<.001$)。これは、ストレスが少ないときにはサポートの多寡による心理的苦痛の違いはないものの、ストレスが多いときにはサポートが低い場合と高い場合で心理的苦痛の程度が異なり、サポートが多いほど心理的苦痛をあまり感じなくてすむ、という父親サポートのストレス緩衝効果を意味しているといえる。



以上のように、他者依存性の高低別におこなった共分散分析の結果は、両群で大きく異なっていた。すなわち、他者依存性の高い群では、ストレスが心理的苦痛を高めるとい主効果が顕著であり、サポートの主効果や交互作用効果は何ら有意ではなかった。それに対して、他者依存性の低い群では、ストレスの主効果はなく、サポートが心理的苦痛を防ぐ直接効果が広範にみられ、さらに父親サポートのみではあるが、サポートのストレス緩衝効果も認められた。

考 察

本研究の目的は、他者依存性とソーシャル・サポートの関連性を検討することであった。具体的には、他者依存性の高さによって、周囲の人からのサポートの入手可能性の程度が異なるのかどうか、また心理的苦痛に対するサポートの効果が異なるのかどうか、を検討することであった。サポートの効果については、直接効果だけでなく生活ストレスの悪影響を和らげるものとしてサポートの緩衝効果が取り上げられた。また周囲の人々全般

(全体サポート)についてだけでなく、父親、母親、同性の友人という特定の他者に関するサポートの入手可能性(父親サポート、母親サポート、友人サポート)も測定された。

その結果、まず相関分析によれば、他者依存性とソーシャル・サポートの間には、何ら関連性が認められなかった。これは全体サポート、父親サポート、母親サポート、友人サポートのいずれについても同様であった。これは、本研究で用いられた他者依存性尺度で測定されるような、社会的な場面で自信がなく他者に頼りたいという欲求を強く持っている人が、量的にはそうした欲求が強くない人と同程度のサポートが得られると認知していることを示す。すなわち、少なくとも第三者的にみるならば、依存性の強い人にとって周囲に十分なサポートが存在しないわけではなく、したがって十分なサポートが存在しないが故に他者への依存性が強まっているわけではないのである。言い換えれば、依存性の高い人は、少なくとも依存性の低い人と同じ程度の支持的な対人関係をもっていると言えよう。なお、依存性の高さはストレス者の経験回数とも正の相関があり、少なくとも自己報告では依存性の高い人ではつらさを感じるような出来事をより多く経験している、との結果も示された。

しかしながら、他者依存性の高群と低群を設定した共分散分析によれば、心理的苦痛に対するサポートの効果は大きく異なり、依存性の高い群ではサポートの有意な効果は主効果、交互作用とも全く認められなかった。むしろストレス者経験の悪影響が非常に顕著にみられた。サポートが心理的苦痛を軽減する効果を示したのは、依存性の低い群のみであった。サポートのストレス緩衝効果がみられたのは一部のみであったが、それも依存性の低い群でみられた結果であった。このことは、社会的な場面で自信がなく他者に頼りたい、頼らねばやっていけないという気持ちを慢性的に強く持っている人では、周囲の他者からサポートが得られるとしても、それは当人にとって心理的苦痛を防ぐようなポジティブな効果をもつものではなく、さらには生活の中で何らかのネガティブな出来事を経験するとその悪影響を容易に受けてしまう、ということの意味している。ストレス者の効果の違いについては、相関分析で示されたように依存性の高い群の方が全体としてストレス者の水準も高いため、やや解釈に慎重さが必要である。しかしながら、心理的苦痛とストレス者経験の間には一般に直線的な関係が認められており、基本的には本研究でも、依存性の高さによってストレス者の影響度自体が異なる、という解釈が可能であろう。そして、他者依存性とソーシャル・サポートの間に有意な相関がなく、依存性の高い人と依存性の低い人とでサポートの入手可能性には違いがみられない、という結果と合わせてこの共分散分析の結果を解釈するならば、依存性の高い人は周囲にある程度の支持的な対人関係をもちながら、その恩恵を十分に引き出すことができない、ということを示唆していると思われる。しかも、そうした現象は、単に抽象的な周囲の人々一般についてだけでなく、父親や母親、友人といった具体的・個別的な人との関係についても言えることなのである。

以上のように、本研究では、他者依存性の高い人では周囲の人からのサポートの入手可能性が低いわけではないにもかかわらず、心理的苦痛との関連ではサポートの効果がみられないことが示された。このことは、依存性の高い人において、ある程度のサポートが存在する場合でもそこからポジティブな効果を引き出すことができない何らかの要因があることを示唆する。本研究の「他者依存性の低い群でのみサポートの効果が認められた」

という結果を従来の研究と比較すると、Keinan & Hobfoll (1989) による「依存性の高い人の方がサポートの多寡による影響を受けやすい」という知見よりも、むしろ Lefcourt et al. (1984) の「親和欲求の高い人よりも低い人においてサポートの効果がより顕著にみられる」という知見により近いようである。本研究の調査対象サンプルや使用した測度はこれらの研究と必ずしも同一ではなく、直接の比較には慎重でなくてはならない。しかしながら、例えば Bornstein (1992) が述べているように、依存的な人は周囲に養護的・支援的な関係を獲得し維持することそれ自体への強い欲求をもつ。この点で、依存的な人は対人関係に対する手段的な志向性が乏しく、そのため自らの効力感や対処行動を促進するようなポジティブな効果を引き出しにくい (Lefcourt et al., 1984; Hill, 1987) のかもしれない。今後の研究において、依存性の高い人においてサポートの恩恵を得ることを困難にしている心理的要因が何であるのか、を明らかにしていくことが必要である。なお、こうした取り組みは、周囲の人々との間に温かい関係をもちたい、という人の基本的な欲求とも密接に関連するものであるがゆえに、人々の心理的な安寧にも寄与するものとなりうるように思われる。

註

本研究は、著者らによって日本社会心理学会第34回大会 (1993) で発表されたデータに未分析のデータを加え、再分析したものである。

謝 辞

本調査にご協力くださいました学生の皆様方に、厚くお礼申し上げます。また、本研究の遂行にあたっては、橋本宰同志社大学文学部教授のご援助を賜りました。記して感謝いたします。

引用文献

- Aiken, L.S., & West, S.G. 1991 Multiple regression: Testing and interpreting interactions. Newbury Park: Sage.
- Baumeister, R.F., & Leary, M.R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Birtchnell, J. 1991 The measure of dependence by questionnaire. *Journal of Personality Disorders*, 5, 281-295.
- Blatt, S.J., D'Afflitti, J.P., & Quinlan, D.M. 1976 Experiences of depression in normal young adults. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 388-397.
- Bornstein, R.F. 1992 The dependent personality: Developmental, social, and clinical perspectives. *Psychological Bulletin*, 112, 3-23.
- Bornstein, R.F., & Johnson, J.G. 1990 Dependency and psychopathology in a nonclinical sample. *Journal of Social Behavior and Personality*, 5, 417-422.
- Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314.

- Cohen, S., & Syme, S.L. (Eds.) 1985 Social support and health. Orlando: Academic Press.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673-679.
- 福岡欣治・橋本 宰 1992 個人のもつ特定のサポート源に関するソーシャルサポートの測定 健康心理学研究, 5(2), 32-39.
- 福岡欣治・橋本 宰 1993 クラスタ分析によるサポート内容の分類とその効果 日本心理学会第57回大会発表論文集, 157.
- 福岡欣治・橋本 宰 1995a 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康との関係 教育心理学研究, 43, 185-193.
- 福岡欣治・橋本 宰 1995b 内容別にみた知覚されたサポートの効果について 同志社心理, 42, 11-22.
- Gottlieb, B.H. (Ed.) 1981 Social networks and social support. Beverly Hills: Sage.
- Hill, C.A. 1987 Social support and health: The role of affiliative need as a moderator. Journal of Research in Personality, 21, 127-147.
- Hirschfeld, R.M.A., Klerman, G.L., Gough, H.G., Barrett, J., Korchin, S.J., & Chodoff, P. 1977 A measure of interpersonal dependency. Journal of Personality Assessment, 41, 610-618.
- 久田 満 1987 ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究, 20, 170-179.
- 稲葉昭英 1992 ソーシャル・サポート研究の展開と問題 家族研究年報, 17, 67-78.
- Keinan, G., & Hobfoll, S.E. 1989 Stress, dependency, and social support: Who benefits from husband's presence in delivery. Journal of Social and Clinical Psychology, 8, 32-44.
- Lefcourt, H.M., Martin, R.A., & Saleh, W.E. 1984 Locus of control and social support: Interactive moderators of stress. Journal of Personality and Social Psychology, 47, 378-389.
- McDonald-Scott, P. 1988 INTERPERSONAL DEPENDENCY INVENTORY Japanese Short Form (JIDI): その作成と検定について 看護研究, 21, 451-460.
- Overholser, J.C. 1992 Interpersonal dependency and social loss. Personality and Individual Differences, 13, 17-23.
- 尾関友佳子 1990 大学生のストレス自己評価尺度 質問紙構成と質問紙短縮について 久留米大学大学院紀要・比較文化研究, 1, 9-32.
- Veiel, H.O.F., & Baumann, U. (Eds.) 1992 The meaning and measurement of social support. New York: Hemisphere.
- Zung, W.W.K. 1965 A Self rating Depression Scale. Archives of General Psychology, 12, 63-70.